

あいであ & アイデア

哺育施設(手作りカーフハッチと哺乳ロボット)のアイデア

～(農)宮澤農産小南牧場(千葉県香取郡東庄町)の事例～

木下 瞬

生まれたばかりの子牛は皮下脂肪が少なく、体温調節も上手にできないため、寒さの厳しい冬場には、風邪を引きやすく下痢には特に注意していかなければなりません。一度、病気が発生してしまうと、治療のコストがかかるだけでなく、その後の子牛の成長にも大きく影響を及ぼすおそれもあります。

こうした疾病などから子牛を守るためには、カーフハッチを利用するなどの防寒対策がありますが、今回は子牛に限らず徹底した飼養管理技術で仲間からの評価の高い千葉県の宮澤農産(和牛、F1一貫経営)が取り組んでいる事例を紹介します。

手作りカーフハッチ

写真1が、当経営の牛舎内に設置されている手作りカーフハッチです。

それぞれのハッチは子牛の飼養管理と作業性の観点から丁寧に設計されています。設置についても、ハッチ間は適度の間隔を保持しつつ、牛舎内を清潔に保っています。

写真2が個別のカーフハッチです。写真から確認できませんが、カーフハッチの牛床には安価な市販のふろマットを使用しています。

写真中央の手製の哺乳瓶ホルダーは、作業効率を上げるため多頭飼育には欠かせません。また、子牛が飲みやすいよう角度を調整して設置されています。



(写真1) 各個室が適度の間隔をとっているカーフハッチ



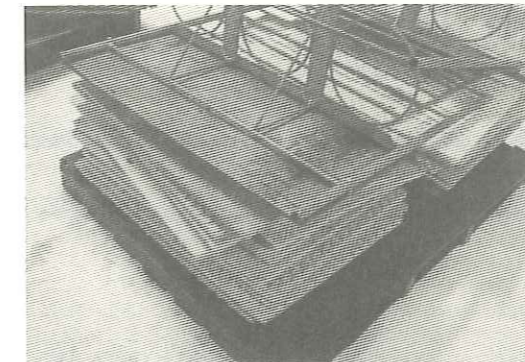
(写真2) ふろマットや哺乳瓶ホルダーなどのアイデアが活かされている

アイデアがいっぱいのカーフハッチ

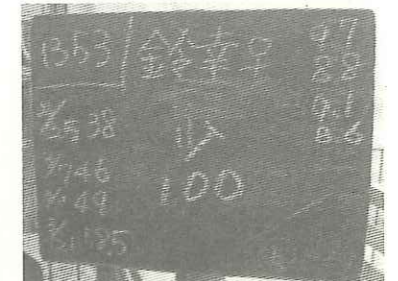
カーフハッチごとに設置された黒板には、日々の検温の結果等を記入し、子牛の健康状態が一目で分かるようにしてあります(写真3)。こうした日々の個体管理の徹底が、病気や事故の低減につながります。

前述したように、牛床にはコスト、サイズ、機能性(保温性・衛生性)を考慮し、市販のふろマットを使用します。逆にいえば、カーフハッチはふろマットの外周のサイズにあわせて、設計されています。ちなみに、マットは毎回、ホームセンターでほぼ買い占め状態とのことです。

また、体温調節のために子牛にはマフラーを巻いています。



(写真4) ふろマットの大きさにあわせて設計されるカーフハッチ



(写真3) カーフハッチごとに設置してある黒板



(写真5) 防寒対策用のマフラー

哺乳ロボットを活用した給与メニューの体系化

生後21日目には、牛舎を移動し、哺乳ロボットを活用するようにしています。牛床は清潔に保たれ、子牛1頭当たりのスペースも十分に確保されているなど、子牛にストレスがかからないよう配慮しています。

カーフハッチから哺乳ロボットまでの人工哺育の給与メニューは、体重や発育ステージに合わせて体系化されています。

宮澤農産の経営において、人工哺育後は、育成・肥育し、生体出荷を行います。以上のようなこまめな飼養管理をはじめとして、格付けもA4等級以上が90%と安定してきています。

また、牛舎の出入りは消毒を徹底するなど衛生面にも非常に気をつけています。参考にすべき点は多いのではないのでしょうか。

(筆者: 社中央畜産会 管理部(企画調整) 技師)

あいであ & アイデア